

おおいに遠藤周作先生を語り、歌って賑やかに

今年も9月29日（水）午後6時から、東京の如水会館「松風の間」にて、第14回『周作忌』の集いが開かれました。遠い空の上から遠藤先生も駆けつけて、ビデオから元気な姿を見せてくださいました。

遠藤先生の笑顔の前で語り合う

いつまでも続く残暑を終わらせた長雨を、ほんの少しの間途切れさせて、この日、天国から遠藤先生が舞い降りていらっしやいました。

全国から150名を超す遠藤先生ゆかりの人々、遠藤文学を愛する方たちが、9月29日夕方、東京神田一ツ橋の如水会館には恒例の第14回『周作忌』の集いのために集まってきました。会場に一步入ると、遠藤先生の写真がズラリ。元気に笑い声をあげる姿、いたずらっぽく笑った目、原稿を執筆する真剣な表情……。写真家の稲井勲さん撮影のパネルです。

まずは司会の高橋千劍破幹事の紹介で、作家で周作クラブ顧問の黒井千次さんより開会のご挨拶です。「いつの間にか、遠藤さんが亡くなった73歳を超えてしまいました。遠藤先生から学んだことが多かった」

続いて、劇団樹座と囲碁の宇宙棋院の両方にゆかりのある池田弘孝さんが壇上に立たれました。「軽井沢にある遠藤先生の家に泊めていただいたとき、遠藤先生は『人間70

歳までやで〜。それまでに遊んどけや〜』と言われました。今、それだけを忠実に守っています」

と話し、会場の人々の笑いを誘いました。

続いて、遠藤順子夫人がしっかりとしつたお声でご挨拶なさいます。

「みなさま、今日はどうぞ楽しく過ごしてください。それが主人の喜ぶことだと思います」

献杯の発声は、元弘前大学学長の吉田豊さん。

「遠藤先生は、『人生マイナスのなかにも、必ずプラスがあるもの』とよくおっしゃっていました」

と挨拶されてから、「献杯！」の掛け声とともに、全員が唱和して、しばし歓談へ。参加者同士の話もはずみ、おなが膨らんできたころ、劇団樹座の公演ビデオが上映されました。

茶目つけと優しさあふれる逸話が

映像からは、遠藤先生や樹座のメンバーの元気いっぱい姿が次々と現れます。「マイフェア・レディ」「王妃マリー・アントワネット」「コーラスライン」「蝶々夫人」「風と共に去りぬ」

等々。古今の名作を臆することなく舞台化した素人劇団のパワーは圧巻！会場の登場経験者たちからは、「あつ、〇〇さんだ」「懐かしいー」などといった声がざかんに上がっています。

ラストステージの追悼公演からは、演出の山崎陽子さんの「やる人天国、みる人地獄。今日で樹座は幕を閉じますが、皆様の心のなかにいつまでも残ることと思います」

という最後の舞台挨拶が。そのタイミングを見て、参加者たちに歌詞カードが配られて、全員で「樹座讃歌」の合唱です。

「クレオパトラ」「忠臣蔵」などの舞台背景を手掛けた舞台美術家の妹尾河童さんも壇上に飛び乗り、「遠藤先生のリクエストで、同じミジノコの鼓動の話を7回も対談でさせられたんですよ」という話など、ユーモアあふれたエピソードを語られました。

会場が笑いの渦に包まれるなか、洋菓子研究家の今田美奈子さんが遠藤先生との出会いのエピソードを。遠藤先生に出したお礼状に、そのまたお礼状が届いたのだそうです。

「あなたのことは一番よく覚えていいます。なぜなら、あの会場で、一番美しい人だったから」

ところが、それまで遠藤先生は何百人もの女性に同じようなお手紙を出されていたのだとか。それでも、受け取った女性はきつと幸せな気持ちになったことでしょう。遠藤先生の茶目つけと

思いやりを感じます。

続いて、長崎の遠藤周作文学館の初代館長である東満敏さんの、「『文学館にきて、心救われた』という人が大勢います」

という話を受けて、司会の高橋幹事が「長崎の文学館にたびたび行った人に、遠藤先生の『沈黙』の講演会テープをプレゼント！」とサプライズゲームを提案。

ジャンケンで勝ち残ったのは、名古屋から来た寺井まみ子さん。文学館で、偶然遠藤夫人にお会いしたことがあるそうです。

それぞれの参加者たちがくつろぎ、話はずむなか、残念ながら会の終わりの時間がやってきました。

加藤宗哉幹事より、来年のすてきなお知らせがありました。横浜の港に見える丘公園にある神奈川近代文学館において、来春4月末から6月上旬にかけて「遠藤周作展」の開催が決定されたとのこと。

「来年は没後15年になりますが、留学前に書いた掌編小説6編が新たに発見されたことも含めて、展覧スペースも今までの最も広いものになるでしょう。それを楽しみに、また、来年もこの会場でお目にかかりましょう」

樹座ばかりではなく、遠藤先生ゆかりの人々の集まりは、まだまだほかにたくさんあります。そういった会の方々も、ぜひ来年はここに集って一緒に語りあいましょう。

（記・写真／高木香織）